

古賀郷土史研究会通信

発行日
令和6年3月15日
通信(第19号)

「今の庄」の地名由来

今の庄は古賀市役所から三号線に向かつて行く
と、庄の交差点があり、三号線を越えない地域が
「今の庄」の地域になります。「今の庄」の地名に
ついては、明治十九年(1886)発行の「地方
行政区画便覧」には「今の庄」の地名の記録は無
く、平成七年(1995)十一月六日に新住所表
示実施において「今の庄」の地名が新しく付けら
れています。

「今の庄」の新住所表示が必要とされた理由と
して、大字古賀、大字久保、大字庄、大字今在家
の一部の地域が入り混じっているため、郵便配達
の人や消防署の人などが場所(住所)の特定がし
にくいという理由で、はっきりと分る住所にする
ために新しく住所が付けられたそうです。

平成七年八月に古賀市審議会で地名が検討され、
新庄、西の庄、今の庄、けやき、末広、扇という
六つの名称が候補に上がったそうです。審議の結
果「今の庄」と「けやき」に絞られました。結
局「今の庄」に決定したそうです。「けやき」の地

名については、町道五号線に樺並木が植えられて
いた事から住民から強く要望されていたようです。
決定については、今在家区、庄南区、庄北区で二
名ずつ出て検討して決まったそうです。

「今の庄」の地名由来を考えると、近隣の「今在
家」地区と「庄」地区を取って「今の庄」と地名
が付いたと考えられます。もし鎌倉時代以降に
付いた地名とするなら、「今」は新しいという意
味で「新しい庄」という事になります。「庄」は
荘園の略字で、サンコスモ古賀の周辺には荘園時
代の小字名が多く残っていますので、昔から存在
した地名と言われてもおかしくない地名です。

(飯島勇一郎)

戦国古文書は楽しい

さまざまな古文書の中でも戦国時代に生死をか
けた武将の文章には独特の魅力がある。その面白
さを簡潔書きにまとめてみた。

①「簡潔な表現」多くは一枚の和紙に数十字でま
とめられ、運筆、内容ともに力強い。「一筆啓上、
火の用心、お仙泣かすな馬肥やせ」は日本一の短
文として有名。

②「内容に含蓄」「辛苦紙面に尽くし難く」など
抽象的な表現は奥深く、特に軍事機密に関する書
状は様々に解釈出来て想像がふくらみ興味深い。

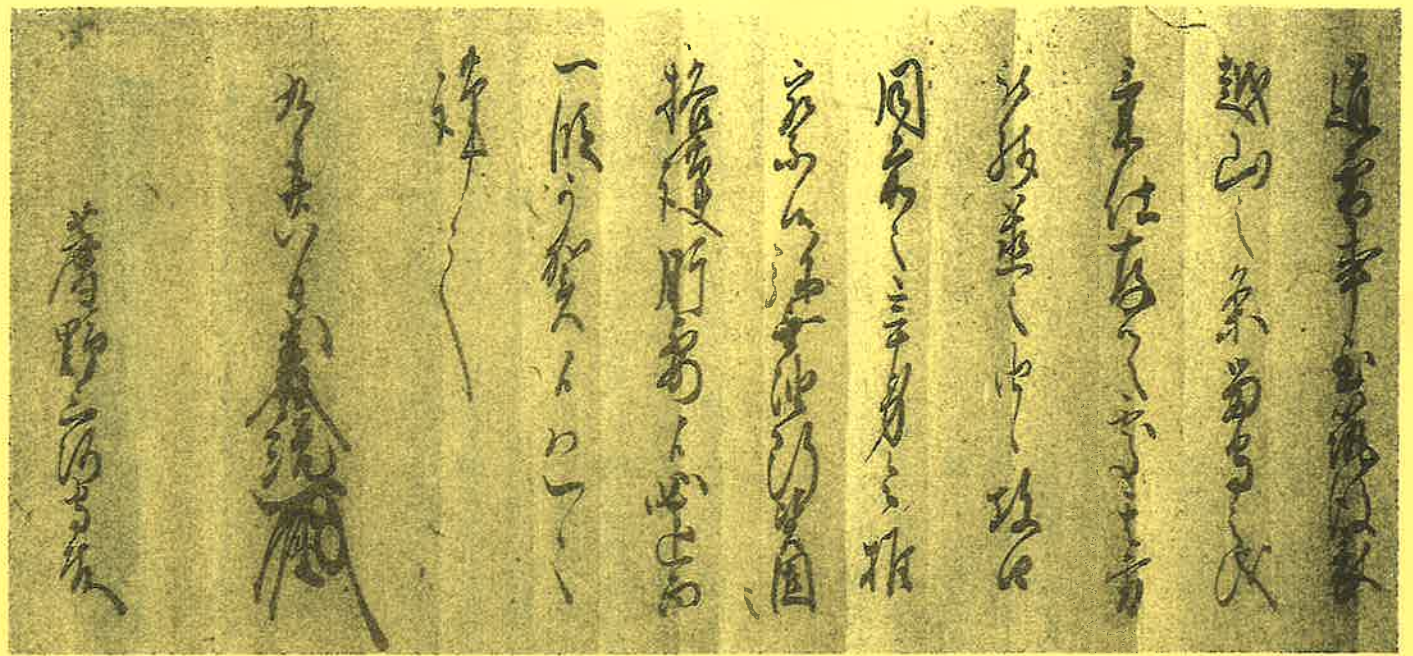
③「年代の特定」古文書はほとんど月日のみで年
号がない。重要な合戦の書状でも今だに何年か特
定できないものも多く論争になることも。文面の
地名、人名、花押などから年代をしぼりこむ勉強
には謎解きの面白さがある。

④「書は人」有名な武将の書状は多くが秘書役の
佑筆書きだが決裁の日付と署名、花押は必ず自筆
で内容と共にその人の教養、人柄まで見えてくる。
特に自筆文はどんな人かを知る手がかりになる。

⑤「崩し字の学習」書状の多くは手紙だから、昔
の人は読めたのに現代の我々が読めないのは活字
文化しか知らないためで、昔の人は子供の頃から
楷書と同時に、速記に必要な崩し字を学んでいた。
古文書の原文には「これが文字か」と敬遠される
ことがあるが、馴れると徐々に読めてくる。古文
書の解説は翻訳に似て、過去と現代を結ぶ通訳と
思えば役に立つことがある。

⑥「時代の証明」戦国時代の解明には古文書が不
可欠で第一級の資料となる。特に先祖の手柄を物
語る書状などは子孫の誇りであり、家柄の証しと
して大切に保存されてきた。戦争などで失われた
ものも多いが、写しによる現存もたくさんあり、
公表された文書は図書館などで原文のコピーを入
手できる。時代を証言する古文書から何を読み取
るかは学ぶ側の着眼、視点が大切になる。

(裏につづく)



古文書の実例

解説「大友義統書状」

道雪事至筑後表

越山之条留守之儀

気仕存候之処其方

被残置之由候攻口

同然之辛勞令推

察候弥無油断堅固之

格護肝要候必追而

一段可賀候恐々

謹言

九月廿八日 義統（花押）

薦野三河守殿

読み下し

道雪こと筑後表へ至り越山の条、留守の儀、

気仕（氣遣）存じ候の処、其方（増時）残し

置かれるの由。攻め口（戰場）同然の辛勞、

推察せしめ候。いよいよ油断なく堅固の格護

（覚悟）肝要候。必ず追って一段賀すべく候。

恐々謹言

（天正十二年）九月二十八日 （大友）義統

薦野三河守（増時）殿

説明

天正十二年（一五八四）八月、立花山城主戸次

道雪は、岩屋城主高橋紹運と共に筑後へ耳納連山

を越えて出陣にあたり、留守のことが心配だったが、薦野増時を城に残し置くとのことで安心した。城主不在の城を守ることは戰場同様の苦勞あると察するが堅固の覚悟が大事。必ずいづれ恩賞を約束する、との内容。

四面楚歌の立花山城の留守を任された増時は、大友宗麟の跡を継いだ大友義統から見れば、家臣である道雪の家臣（陪臣）にすぎないが、城代にふさわしい人物として信頼、期待されていたことがわかる。城主の長期不在には謀反が起こりやすく、天正十三年には立花山で桜井中務が秋月に通じて城に放火を計画、増時家来の安部弥太兵衛尉と東郷三九郎に討ち取られ未遂に終わっている。道雪の筑後遠征は生涯最後の出陣で、そのまま越年、翌天正十三年九月十一日、七十三歳で戦場に病没した。原文は薦野家譜文書、サイズは縦十二・七、横四十八・四センチ（顧問 土師 武）

お知らせ

古賀郷土史研究会では、ホームページを開設しました。古賀にまつわる歴史と文化に関する情報を発信しています。



連絡先 古賀郷土史研究会

飯島勇一郎（会長）

☎(092)943-6850